

ジョイント仕立て樹における‘新甘泉’‘秋甘泉’の成熟特性調査

1 情報・成果の内容

(1) 背景・目的

ナシでは樹体ジョイント仕立てによる栽培面積が増加しているが、各樹体における果実の成熟特性は明らかではない。そこで本試験では、‘新甘泉’および‘秋甘泉’における各樹体内での着果位置と成熟の関連性を検討した。

(2) 情報・成果の要約

- 1) ‘新甘泉’は、1樹体内では、先端部の果実から成熟が進む傾向があるため、収穫は先端部からすすめる。
- 2) ‘秋甘泉’は、着果位置と成熟との関係に一定の傾向は認められなかった。

2 試験成果の概要

- (1) ‘新甘泉’及び‘秋甘泉’（樹齢15年生）を表1のとおり供試した。果実調査は図1のように主枝を境界として側枝の片側ずつを収穫始めと終わり（以下1回目と2回目とする）に実施した（図1）。

表1 処理区の設定

品種	栽培方法	供試樹
‘新甘泉’	有袋栽培 ^z 1列	3樹
‘秋甘泉’	有袋栽培 ^z 1列	4樹

z:6/21に袋かけを実施

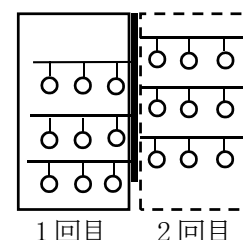


図1 収穫調査方法

- (2) 収穫は各品種とも2回ずつ行い、‘新甘泉’は2021年8月19、26日、‘秋甘泉’は9月3、10日に着果位置がわかるように収穫し、果色と糖度を調査した。
- (3) ‘新甘泉’では、収穫1回目は先端部の方が糖度が高く、果色の進みも早かった。2回目はほとんどの果実が成熟し、着果位置による果実品質の差は認められなかった（図2、果色のデータ省略）。
- (4) 一方、‘秋甘泉’は、着果位置と果実品質に一定の傾向は認められなかった（図2、果色のデータ省略）。
- (5) 以上の結果、‘新甘泉’は、1樹体内では先端部から成熟する傾向があるため、収穫は先端部からすすめることで適熟果実を得ることが可能である。一方、‘秋甘泉’の成熟特性は判然としなかった。

3 利用上の留意点

‘新甘泉’は、1樹体内では、先端部から熟れる傾向がみられるが、収穫適期は1週間程度なので収穫遅れに注意する。

4 試験担当者

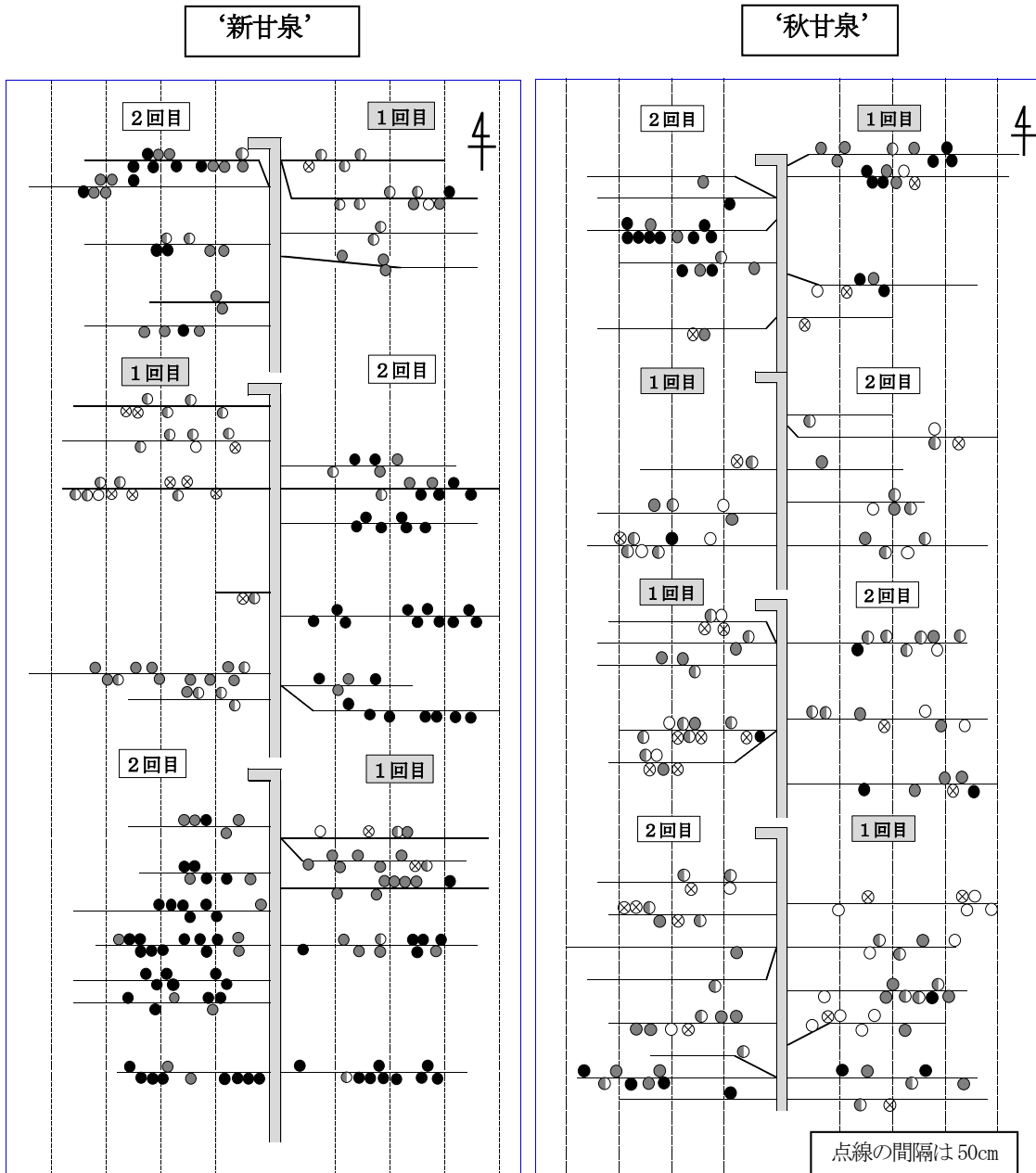
果樹研究室

研究員 門河紘希

研究員 小倉啓右（現 西部総合事務所農林局 農林業振興課生産流通担当 農林技師）

研究員 安藤るな

室長 山本匡将



糖度(° Brix)の指標(‘新甘泉’)	
●	14.0～
●	13.5～13.9
◐	13.0～13.4
⊗	12.5～12.9
○	～12.4

糖度(° Brix)の指標(‘秋甘泉’)	
●	13.5～
●	13.0～13.4
◐	12.5～12.9
⊗	12.0～12.4
○	～11.9

図2 ‘新甘泉’ および ‘秋甘泉’ の 着果位置別の糖度分布